

# 清末探偵小説史稿(一)

— 翻訳を中心として —

中村忠行

## (一) コナン・ドイルの紹介

### (1)

光緒三十二(1906)年四月、商務印書館発行『説部叢書』第一集第四編として上梓された『補訳華生包探案』の序文に、次の様な一節がある。

最先訳包探者、為上海時務報館、即所謂『歇洛克唔斯筆記』是也。呵爾唔斯即福爾摩斯、滑震即華生、蓋訳写殊耳。嗣上海啓明社統訳凡六則、上海文明書局復選訳七則。顧華生自言、嘗輯福生生平所偵奇案多至七十件。然此不過三分之一耳云々。



序文は、光緒二十九年癸卯仲冬、商務印書館主人の名義で書かれてゐる。序文が認められてから、説部叢書本が上梓されるまでに二年半もの歳月が流れてゐるのは、阿英氏編『晚清戯曲小説目』の示す様に、先行する異版があるからであらう。架蔵の『経国美談』は、説部叢書本と同じ版式ながら、表紙は墨一色刷で、縁枠も簡単、且つ「説部叢書 第一集第二編」の文字がない。又、同じく説部叢書本で、体裁は全く同じでありながら、「初集第四編」とし、「補訳」の文字を削つて、単に『華生包探案』と題するものがある。これは後刷である。それはともかく、上に引く序文の一節は、顧燮光の『小説経眼録』・「補訳

華生包探案」<sup>1)</sup>の条下にその儘利用されてゐるから、気付いてゐる人も少くはあるまい。

又、寅半生（鐘駿文）は、『小説閒評』巻一に、『偵探談唯二四名案』（光緒二十九〔1903〕年、文明書局刊）を評して、

此「福爾摩斯包探案」也。華生筆記、多至七十余案。其首先訳出而為小説家所歡迎者、始於『時務報』、曾經彙印成冊、名曰『包探案』。而商務印書館『繡像小説』中『続包探案』繼之。然皆集録之体、自成篇段。……  
 と言つてゐる。<sup>2)</sup>文中の『包探案』は、光緒二十五年、素隱書屋から上梓された『新訳包探案』を指す。而して、『続包探案』と記すのが、既述の『補訳華生包探案』で、書名の相違は、記憶違ひに基くものであらう。その口吻に、件の序文と一脈相通するものがあるから、寅半生もこれを読んでゐたかと想像されるが、今は暫く問はない。又、素隱書屋は、同じ年の夏、冷紅生（林琴南）・王寿昌合訳の『茶花女遺事』を上梓した書肆であるが、後年、林琴南が「当年汪穰卿舎人為余刊『茶花女遺事』即入『華生包探案』、風行一時云々」（『歐洛克奇案開場』序）と言つてゐるのを見ると、汪康年の弟汪詒年が経営してゐた書肆ででもあらうか。『茶花女遺事』の初印本には、扉裏に「己亥夏素隱書屋託昌言報館代印」とある。前年の政変によつて、『昌言報』（汪康年主持）は停刊となつてゐたけれど、この種の印刷は、猶続けてゐたらしい。光緒辛丑〔1901〕年刊の玉情瑤怨館本が、汪康年の家刻本であることも、右の推測を裏書きする。

とまれ、これらの記述に従へば、『時務報』に掲げられた「歐洛克唔斯筆記」が、中国に紹介された西洋種の探偵小説の嚆矢であるといふ説は、はやくから一般に信ぜられてゐたものらしい。謂ふところの「歐洛克唔斯筆記」とは、コナン・ドイル（Arthur Conan Doyle. 1859-1930）のシャーロック・ホームズもので、原作名を併せて表示すれば、次の如くである。

(華 訳 名)	(掲 載 号)	(掲 載 年 月 日)
英包探勘盜密約案	第六冊～九冊	自光緒二十二年〔1896〕八月一日 至 同 九月二十一日

The Naval Treaty. (*The Memoirs of Sherlock Holmes*. 1894)

1) 阿英編『晚清文学叢鈔』・「小説戯曲研究巻」所収。

2) 同上。

- 記僞者復讎事 第十冊～十二冊 自光緒二十二年十月一日  
至 同 十月二十一日  
The Crooked Man. (Ibid.)
- 継父誑女破案 第二十四冊～二十六冊 自光緒二十三年〔1897〕年三月二十一日  
至 同 四月十一日  
The Adventure of a Case of Identity. (*The Adventures of Sherlock Holmes*. 1892)
- 阿爾唔斯緝案被戕 第二十七冊～三十冊 自光緒二十三年四月二十一日  
至 同 五月二十一日  
The Final Problem. (*The Memoirs of Sherlock Holmes*.)

訳者は、同報の英文翻訳担当の記者であつた張坤徳(字、小塘)であると、周新庵は言ふ(後述)が、素隱書屋刊本には、「時務報館訳。丁楊杜訳」と併記してある趣きに、阿英氏は記してゐる。何れが是か、或いは個々別々の訳出になるものか、詳細は審らかではない。訳文は、

英包探勘盜密約案 訳歇洛克阿爾唔斯筆記

英有攀息名翻爾白斯姓者、為守旧党魁爵臣阿爾黑斯特之甥、幼時嘗与医生滑震同学、年相若、而班加於滑震二等、衆以其世家子文弱、頗欺之。蹴球則故擲球其身以為樂。然性敏慧、館中課試輒高列、得獎賞最多。後学成、入大書院、已而仕外部、以有才又得舅之援、故每得差遣。後其舅為外部大臣、又与升轉。部中有要事、無不与聞。一日呵密召攀息至其室、以灰色紙一捲授之。曰、此英意密約、俄法使臣、欲以重金購之。外間報館、已有知者、不可再洩、故特命汝書、汝宜鎖諸書桌屨內、迨晚我当遣各人去、汝速書竟、仍藏諸屨、明早我至部、呈我可也。攀息謹受教。……

といつた調子のもので、梗概をあらあらと綴るばかり、時に大きな改変がある。例文の個所について言へば、原文冒頭の

The July which immediately succeeded my marriage was made memorable by three cases of interest in which I had the privilege of being associated with Sherlock Holmes, and of studying his methods. ……

以下の一節は省略されてゐるし、パーン・フェルプスからワトスンに充てた手紙以下、数頁の文章は後に廻され、フェルプスがホームズに事件の経過を話す条りに織込まれてゐる。その為、筋が平明となり、探偵小説としての面白さは

失はれ、原作者独特の話術の巧みさも、印象が薄れたものとなつてしまつた。しかし、作者が設けたトリックなり、「ホームズの分析的探偵法の真価」(The value of his analytical methods.) を発揮する条には、大意訳ながら、素直に翻訳されたから、作品の面白さは或程度伝えられる訣で、旧小説に目馴れた時人の眼には、やはり新鮮なものに映つたであらう。『施公案』八卷九十七回の上梓(道光十八[1838]年)は少しく溯るから暫く措くも、貪夢道人の『彭公案』二十四卷百回の上梓が光緒十七[1891]年、某の『後施公案』百回が光緒二十[1894]年刊といった文壇の水準を、十分認識して置く必要がある。

少しく立場を変へ、西欧文学の中国への流入といつた観点から眺めて見ても、既に『昕夕閒談』(同治十三[1874]年刊。原作未詳。ヴィクトリヤ朝期のイギリス教養小説らしい)や『百年一覚』(光緒二十年[1894]刊。李提摩太 Timothy Richard 訳。原作は<sup>3)</sup> Edward Bellamy: *Looking Backward* 2000-1887.) の様な作品が、ぼつぼつ翻訳され始めてはゐるが、極めて寥々たる数であり、現在知られてゐる凡てを拾つても、十指は出でまい。勿論、林琴南訳『茶花女遺事』(Dumas fils.: *La Dame aux camélias.*) や『黒奴顛天録』(Mrs. Stowe.: *Uncle Tom's Cabin.*) が、満天下の青年子女の袖を絞らせるのは、尚数年後のことである。いや、そればかりではない。ドイルその人にしても、漸く作家としてその名が認められたばかり、将来は未知数と言つても差支へない存在であつた。周知の様に、探偵小説家としてのドイルの声価が上つたのは、George Newnes (1851-1910) に頼まれて、創刊(1891年1月)後間もない *The Strand Magazine*. に、「ボヘミアの醜聞」(A Scandal in Bohemia. 同誌7号、同年7月刊)以下の短篇を書いてからのことである。それ以前は、非常な自信と希望とを有つて書いた「緋色の研究」(*A Study in Scarlet.*)でさへ、幾つかの出版所の間を往復した後、辛うじて *Beeton's Christmas Annual*. (1887年12月)に掲げられはしたが、著作権買切りで二十五磅といふ安値であつたし、*Lippincott's Magazine* (1890年2月)に掲げられた「四つの署名」(*The Sign of Four.*)も、当初暫くは、文壇から黙殺された恰

3) 拙稿「忘れられた清末の翻訳文学二三」(『野草』22)参看。

好であつた。<sup>4)</sup> 件の四篇について見ても、それぞれの初出は、

(作品名)	<i>Strand Magazine</i> (U.K.)	<i>Hapers Weekly</i> (U.S.A.)
The Naval Treaty.	1893年10月～11月	同年10月14日～21日
The Crooked Man.	同年 7月	同年7月8日
The Adventure of a Case of Identity.	1891年9月	同年9月?
The Final Problem.	1893年12月	同年同月

の如くであつて<sup>5)</sup>、これらが単行本に収められたのは、既述の様に、1892年 (Adventures) 乃至1894年 (Memoirs) のことである。つまり、数年前に出版されたばかりの新進作家の作品が紹介されてある訣であるから、これは十分注目に値しよう。

それは、我国に於けるドイルの紹介と対比すれば、一層判然とする。蓋し、我国では、明治二十〔1887〕年頃から、饗庭篁村による Edger Allan Poe (1809-47) の紹介——『西洋黒猫』(Poe: *The Black Cat.*)・『ルーモルグの人殺し』(Poe: *The Murders in the Rue Morgue.*)——や黒岩涙香の手に成る Emile Gaboriau (1830-72), Fortune du Boisgobey (1821-91), William Collins (1824-89), Anna Katharin Green (1846-1935) などの作品の翻案があり、これと前後して坪内逍遙・森鷗外・森田思軒といった本格派の人々の参加、丸亭素人・菊亭笑庸など新人の抬頭が見られ、春陽堂からは『探偵小説』・『探偵文庫』といった叢書の出版まで企画されて、一時はその流行を見る程であつたが、ドイル物の紹介は、彼より尚数年遅れるのである。柳田泉教授に従へば、明治三十二〔1899〕年七月から、水田南陽が「不思議の探偵」と題して、『シャーロック・ホームズの冒険』(*The Adventures of Sherlock Holmes.*)の殆んど凡てを『中央新聞』に訳載したのが、その嚆矢とされる<sup>6)</sup>が、その後

4) John Dickson Carr: *The Life of Sir Arthur Conan Doyle*. Chap. V, Disillusionment: The Thinning of the Dreams., London, John Murray, 1949., pp. 65-68.; Howard Haycraft: *Murder for Pleasure, The Life and Times of the Detective Story*. Chap. III, 'Profile by Gaslight.', Biblo & Tannen, New York, 1968. pp. 48-49.

5) 田中潤司編「シャーロック・ホームズ全篇初出誌名年月表」(江戸川乱歩『海外探偵小説作家と作品』所収)。

6) 柳田 泉「探偵小説史稿」(『続隨筆明治文学』所収)。

に於ても、原抱一庵・三津本春影・岡本綺堂・押川春浪・本間久四郎・群山経堂などが、この方面で筆を染めるのは、三十年代の後半から四十年代にかけてのことであつて、中国に於けるそれとは、かなり様子を異にする。これ亦、我我にとつては、興味深い現象でなければならぬ。

論が少しく岐路に外れたが、序でに一言すると、これらドイルの作品の翻訳が、中国に紹介された最初の海外探偵小説であるといふ表現は、必ずしも肯綮に中るものではない。現に、『時務報』第一冊（光緒二十二年七月十四日刊）の「城外報記」欄には、「英国包探訪略迭医生奇案」が、『倫敦我們報』から訳載されてゐる。

——ロンドンに住む裕福な老商人嚙子生の若い妻は、無聊に堪へられず、妻子のある好男子の医師略迭と密通して、夫の殺害を図る。妻の不倫に感づいた商人は、探偵に相談を持ちかけるが、後を追つて来た妻に狂人扱ひをされ、連れ戻される。やがて老商人は死亡し、遺産を相続した妻は歐洲漫遊の旅に出る。老商人の死を怪んだ探偵は、親戚の了解を得て墓を暴くが、屍体は何時の間にか失せてゐる。略迭の行動を怪んだ探偵は、その留守中、家宅捜査を試みる。毒薬に関する研究書、血管に空気を入れ脳の毛細血管を破壊する研究といった論文は見出されるが、極め手になるものは何も出て来ない。一方、旅から帰つた商人の妻は、略迭と結婚するが、その直前、ロンドンの郊外で一女性と二人の子供の怪死事件が起る。女は最近他所から移り住んだ女性で、身許は詳らかでない。警察で調べてゐる裡に、女の引越しを手伝つた車夫も亦原因不明の横死をする。だが、検死に立会つた警官の発見した薬の包紙から、一連の怪死事件が解決する。殺された女と子供は、略迭の別れた妻子であつた。又、毒を盛られた老商人は、納棺後胃を洗滌されて蘇生し、香港行き船に乗せられ、途中で海に投げられ、自殺の様に装はれたのであつた。後に証拠を残すまいとする略迭の陰湿な企画によるものであることは、言ふまでもない。

素隠書屋刊の『新訳包探案』（光緒己亥〔1899年〕刊。恐らくは木版本であらう）及びその改版本たる文明書局版（鉛印）には、右の一編を加へ、これに注して阿英氏は、「叔何南道爾福爾摩斯探案五種」と記してゐる。が、これは少しく疑問で、原作が何であるか、又、『倫敦我們報』といふのも、手許にある *The Cambridge History of English Literature*. Vol. XIC, Chap. IV 'The Growth of Journalism.' の注として附載されてゐる書誌程度では訣らない。後考を俟つ。

時務報には、今一篇、上海の『西字林日報』(North China Daily News.) から訳載された「審断略律致死事」がある。横浜の英国領事館で行はれた夫殺しの裁判記事で、第十六冊から二十三冊(光緒二十二年十二月一日～同二十三年三月十一日刊)に亙つて連載された。小説ではないが、探偵小説に関係するものであるから、一寸触れて置く。

『時務報』に掲げられたこれらの作品が、どの様に読者に迎へられたかは、上掲林琴南の文章以外に徴すべき資料がない。しかし、『時務報』は、創刊後一年ならずして一万二千部を銷し、「為中国有報以来所未有、举国趨之如飲狂泉」<sup>7)</sup>と伝へられてゐるし、爾後の探偵小説の流行が暗に物語つてもゐる様に、時流に乗つて歓迎されたであらうことは、想像に難くない。にも不拘、探偵小説の紹介は、上記の数篇のみで、同誌上から完全に姿を消してしまふのである。

これは、一体どうしたことであらうか。紙面の狭隘といつたこともあらうけれども、『時務報』の主筆が、天性のジュルナリストであつた梁啓超であつてみれば、しかく簡単にこれを抛棄するとは考へられない。現に、後年の『新民叢報』や『新小説』での探偵小説の扱ひ方を見ても、それは明らかである。ましてや、公案物の尚流行しつつあつた当時のことではないか。とすると、「阿爾唔斯緝案被戕」(The Final Problem.) が、文字通り『時務報』誌上を飾つた最後の探偵小説であつたといふことは、尋常ではない。換言すれば、探偵小説訳載の中止は、梁啓超の意志でも読者からの非難の声に因るものでもなく、別の面からする圧力があつたのではないであらうか。

戈公振の『中国報学史』によると、『時務報』は、寄附金を基に創刊されたが、最大の寄附者であつた湖広総督張之洞の干渉が甚しく、年少気鋭の梁啓超は、遂に筆を投じて湖南に去り、光緒二十三年十月、湖南時務学堂の主席教習となつたといふ。<sup>8)</sup> 意見の扞格には種々なものがあつたであらうが、探偵小説の功罪をめぐる両者の見解の相違の如きも、その一であつたのではないか。も

7) 梁 啓超「清議報一百冊祝辞並論報館之責任及本館之経歴」(『清議報』第一百冊)。尚、楊家駱主編『梁任公先生年譜長編初稿』卷六参照。

8) 戈 公振『中国報学史』・第四章第三節「雑誌之勃興」；曾 虛白主編『中国新聞史』・第五章第三節(二)『時務報』的由来及其發展」その他。

つと端的に言へば、「阿爾唔斯緝案被狀」を掲載した時点で、梁啓超は『時務報』に対する意欲を失ひ、裁判記録の紹介で一応は妥協したものの、遂に我慢しきれず、敢て抵抗する姿勢を示したと見たいが、穿ち過ぎるであらうか。

## (2)

光緒二十四〔1898〕年から二十八〔1902〕年までの数年間は、戊戌政変・団匪事件などが相繼いで勃発し、政局が大きく揺れ動いた時代である。この間、『清議報』が創刊され、東海散士の『佳人奇遇』、次いで矢野竜溪の『経国美談』が同誌上を賑はし、既述『茶花女遺事』・『新訳包探案』など、記念すべき出版も見られはしたが、翻訳文学界は未だ低調で、さして見るべきものがない。

が、さうした裡にも、光緒二十七〔1901〕年頃から、新しい気運が徐々に動き始めて来る。その先登を切るものは、黄鼎・張在新訳『泰西説部叢書之一』で、これが又、ドイルのシャーロック・ホームズものである。筆者は、未だ該本に接する機会に恵まれないが、阿英氏の書目によつて内容を推測すれば、次の如くである。

(華訳名)	(原 作 品 名)	(所収作品集)
毒 蛇 案	The Adventure of the Speckled Band.	( <i>Adventures.</i> )
宝 冠	The Adventure of the Beryl Coronet.	( <i>Ibid.</i> )
拔斯夸姆命案	The Adventures of the Boscombe Valley Mystery.	( <i>Ibid.</i> )
希臘詩人 (舌カ)	The Greek Interpreter.	( <i>Memoirs.</i> )
紅 髮 会	The Adventure of the Red-Headed League.	( <i>Adventures.</i> )
紳 士	The Adventure of the Noble Bachelor.	( <i>Ibid.</i> )
海 姆	?	

このうち、「毒蛇案」と「宝冠」には、成都啓蒙通俗報社から単行上梓された異版があつて、顧燮光の『小説経眼録』には、それぞれに「於案中情節，言之極詳。訳筆亦奇警可喜」(「毒蛇案」)・「案情離奇，福能精細考察，俾股東之子阿取得以昭雪，誠智矣哉」(「宝石冠」)といつた短評が、附せられてゐる。<sup>9)</sup>

9) 註1参照



当時の読者の眼を窺ふ資料として、珍重に値しよう。

訳者の一人黄鼎は、上海の人、字は佐廷。上海の聖約翰大学 (St. John's University.) を卒業した後、光緒十八年渡米してヴァージニア大学に学び、同二十三年に卒業して帰国した。帰国後は、暫く母校で教鞭を執つてゐたが、二十七年山西大学に迎へられ、三十年には上海米領事館翻訳となり、滬甯鐵路総翻訳を経て、宣統三年駐米留学生監督となつた。その間、マイルズの『万国史』(Philip Van Ness Myers: *General History*. 1889)・レムセンの『化学』(Ira Remsen: *The Elements of Chemistry*. 1890)・クロッドの『進化論』(Edward Clodd: *Human Origins*. 1903)などの翻訳も試み、清末の教育文化界に一足蹟を遺した人である。張在新の伝は、よく訣らない。阿英氏の書目には、又、「議探案 黄鼎・張東新合訳 光緒壬寅[1902]余学齋木活字本」(原作未詳)を録するが、彼此同一人なのか別人なのか、「在」・「東」の何れに誤植があるのかも訣らない。しかし、黄氏の閏歴から推して想像される様に、本書は時流を抜ん出た本格的な翻訳であつたに違ひなく、清末の翻訳文学史上、記念すべき労作たるを失はないのである。

翌光緒二十八[1902]年には、又、珍らしい翻訳が出た。警察学生訳『続訳華生包探案』(文明書局刊)がそれである。訳者から推して犯罪捜査に資する為の参考といった功利的な観点からの翻訳といった可能性が強いが、警察学生といった筆名が用ゐられてゐるところから推すと、訳者は、或いは前年北京警務学堂から宏文書院の速成警務科に送られて来た留日学生中に、求められるかも知れない。扱つたテキストは、教科書用に改編されたものではなく、やはり原書であつたらしく、当初は「親父囚女案」以下の三篇のみであつたが、更に「三K字五橋核案」以下の四篇を加へ、文明書局から再版された。書名に冠せられた「続訳」の文字は、再版本上梓の際に附せられたものであらう。上に仿つて、原作を推定すれば、次の如くである。

(華 訳 名)	(原 作 品 名)	(所収作品集)
親 父 囚 女 案	The Adventure of the Copper Beeches.	( <i>Adventures.</i> )
修 機 断 指 案	The Adventure of the Engineer's Thumb.	( <i>Ibid.</i> )

貴胄失妻案	The Adventure of the Noble Bachelor.	(Ibid.)
三K字五橋核案	The Adventure of the Five Orange Pips.	(Ibid.)
跋海森王照相片	The Adventure of a Scandal in Bohemia.	(Ibid.)
鵝腹藍寶石案	The Adventure of the Blue Carbuncle.	(Ibid.)
偽乞丐案	The Man with the Twisted Lip.	(Ibid.)

因みに、前掲『補訳華生包探案』の序文によれば、『時務報』所載のそれに続いて、上海の啓明社からホームズ物六篇が出版され、嗣いで「上海文明書局復選訳七則」とある。後者が、右の警察学生訳のものを指すことはほぼ間違ひないが、啓明社版は何を指すのか。六則とある以上、既述の黄鼎・張在新合訳本とも別訳であらうが、詳細は明らかでない。

光緒二十九〔1903〕年になると、文壇は俄かに活気を呈して来る。同年五月一日、上海の商務印書館から李伯元を主編者に迎へて、『繡像小説』が創刊されたからである。

これより前——すなはち、前年の十月、「中国唯一之文学報」と誇称して創刊された『新小説』は、読者の期待にも拘らず、第二年に入ると休刊続きで、五月に入つて漸く第四号が出る始末であつた。『繡像小説』の創刊は、直接それに刺戟されての企画であつたに相違ない。『新小説』の少しく高踏的な行き方を避け、それでゐて通俗に墮しない編輯方針を採つた様である。殊に興味深いのは、線装仕立て、作品毎に別個の丁付けをし、毎冊幾つかの繡像(挿絵)を加へてゐることである。大企業による出版であり、執筆陣容にも事欠かぬ基盤を有ちながら、尚この体裁を採るのは、製本技術の問題であるよりも、守旧的な読書人に迎へんが為のものなるべく、旁々欠損を生じた場合を考慮して、単行上梓するに備へる苦肉の策とも見られるので、この種の企画が、未だ冒險的な試みであることを物語つてゐる。それはともかく、同誌は、光緒三十二〔1906〕年三月十五日、七十二期を以て廃刊されるまで凡そ三年近く、半月刊の期日を守つて継続刊行され、清末文壇に異彩を放つた。

繡像小説、在偵探小説風靡一世時、能獨特異議、不刊此類作品、実為難

能。而所刊者，又皆以能開導社會為原則，除社會小説外，極少身邊瑣事，閨閣閒情之著作。若文明小史・活地獄・老殘遊記・鄰女語・負曝閒談・掃迷帚等，均足以說明一時代之變革。<sup>10)</sup>

といふ阿英氏の言は、よくその性格を捉へるものである。

しかし、厳密に言ふと、探偵小説が全く掲げられなかつた訣ではない。初期のものには、「華生包探案」が掲げられてゐるし、以後も「俄国包探案」(原作未詳。水田南陽訳『露国怪物探偵魔王』と関係あるか)・「三疑案」(奥姐作。原作未詳)といった作品が、断続的に掲げられてもゐる。「華生包探案」として訳出されたものは、『シャーロック・ホームズの回想録』(*The Memoirs of Sherlock Holmes*. 1893)に収める諸篇で、これを表示すれば、次の如くである。

(華 訳 名)	(原 作 名)	(掲 載 号)	(発 行 年 月 日)
哥利亞司考得船案	The "Gloria Scott".	四・五期	光緒二十九年 五月十五日～ 六月一日
銀 光 馬 案	Silver Blaze.	六・八・九期	同六月十五日 ～八月一日
孀 婦 匿 女 案	The Yellow Face.	七期	同七月一日
書 記 被 騙 案	The Stockbroker's Clerk.	九期	同八月一日
旅 居 病 夫 案	The Resident Patient.	十期	同八月十五日

『繡像小説』には、今一篇ドイルの作品がある。第七十二期(光緒三十二年三月十五日刊)掲載の『軍書斥候美談』で、訳者は吳禱、高須梅溪訳からの重訳である。原作は、『ジェラルルの冒険』(*Adventures of Gerard: Tales of Napoleonic Soldiers*. 1904)の第三話「准将が狐を殺した顛末——一名：准将の犯罪」(How the Brigadier Slew the Fox, or The Crime of the Brigadier.)、作者自身がジェラルルものの中で一番愛したといふ例の小説である。勿論、これは探偵小説ではないから、暫く対象外に置くべきであるが、ドイルの作品として、この種のものが既に紹介されてゐることは、注目してよいであらう。

10) 阿英「清末小説雜誌略」(良友版『小説閑談』・張静廬編『中国近代出版史料』初編所収)。

却説、『繡像小説』は、片々たる小冊子ではあつたが、如上の編輯方針が採られたから、長篇を連載することも、あながち不可能ではなかつた。従つて、上掲の翻訳は、梗概を綴つただけの『時務報』所載のものに較べると、かなり小説らしいものになつてゐる。しかしその反面、記者に人を得ない時は、得てして誤訳・珍訳をまともに見せつける皮肉な結果を齎すに至ることも、当然予想されるところである。例を「哥利亞司考得船案」にとつて、少しくその翻訳ぶりを窺つてみよう。

余坐暗室内，默会是事。屈雖返坐，余未与言。約一点鐘，女傭含淚持燈入室。余輕步至屈前，見其面作白色，神氣尚清。手握數紙，旋置余膝上，与余对坐，移燈桌旁，授余一信。字跡草草，書灰色紙上，即爾今所閱者。余初讀時，神色張皇，亦如爾之今日。余思其必寓有結党之意。故特編成句讀，參用 Fly-paper 与 her pheasant 等字，以隱指其所為之事。余展玩再四，知為決斷之辭，然終不能索解，疑信參半，料案由必已在是，所用胡狄生字，必又為此信之題。推測至此，已知其係白達司所寄，而非水手。後幅所言，仍不外結党事。惟 Pheasant's life 並非勉勵口氣。又諦審其字句聯絡處，覺 the of 等字，及 for Supply game London 等字，均無涉。再四揣摩，頓得一鑰，知由首字起，每間二字成文。無怪屈父不得其解。然實顯而易見。即為余友讀之曰，The game is up 爭端已起，Hudson has told all 胡狄生已告之衆人。Fly for your life 急行保命。

[右原文]

For an hour I sat pondering over it in the gloom, until at last a weeping maid brought in a lamp, and close at her heels came my friend Trevor, pale but composed, with these very papers which lie upon my knee held in his grasp. He sat down opposite to me, drew the lamp to the edge of the table, and handed me a short note scribbled, as you see, upon a single sheet of grey paper. 'The supply of game for London is going steadily up,' it ran. 'Head-keeper Hudson, we believe, has been now told to receive all orders for fly-paper and for preservation of your hen pheasant's life.'

“I dare say my face looked as bewildered as yours did just now when first I read this message. Then I re-read it very carefully. It was evidently as I had thought, and some second meaning must be buried in this strange combination of words. Or could it be that there was a prearranged significance to such phrases as ‘fly-paper’ and ‘hen pheasant’? Such a meaning would be arbitrary, and could not be deduced in any way. And yet I was loath to believe that this was the case, and the presence of the word ‘Hudson’ seemed to show that the subject of the message was as I had guessed, and that it was from Beddoes rather than the sailor. I tried it backwards, but the combination, ‘Life pheasant’s hen’, was not encouraging. Then I tried alternate words, but neither ‘The of for’ nor ‘supply game London’ promised to throw any light upon it. Then in an instant the key of the riddle was in my hands, and I saw that every third word beginning with the first would give a message which might well drive old Trevor to despair.

“It was short and terse, the warning, as I now read it to my companion :

“‘The game is up. Hudson has told all. Fly for your life’.

相当な豪傑訳である。原文中の暗号文は、この小説の冒頭で語られ、此処では再度出て来るのであるから、訳者が削つた意味も訣らぬではない。その結果、Then I re-read it very carefully ..... 以下に、若干手を加へなければならなかつた理由も訣る。が、some second meaning ..... 以下を、「余思其必寓有結党之意」と訳してゐるのは如何であらう。すぐ後の I tried it backwards ..... を、「後幅所言、仍不外結党之事。惟 Pheasant’s life 並非勉強口氣」などと訳してゐるところから推すと、訳者には this strange combination of words の意味が、よく理解出来なかつたに相違ない。原文に ‘Life pheasant’s hen’ とあるのを、わざわざ暗号文通りに戻して、Pheasant’s life としてゐることによつても、それは明らかである。更に、解説された暗号文が、「老トリ

ヴァを駆つて絶望させるに十分な通報となつた」とある条りを、「無怪屈父不得其解」と訳すに至つては、言語道断である。これは、決して訳者の意識的な改作ではない。蓋し、この条りの伏線ともなつてゐる

Mr. Trevor stood slowly up, fixed his large blue eyes on me with a strange, wild stare, and then pitched forward on his face among the nutshells which strewed the cloth, in a dead faint.

に、「時屈父正立門旁，緩歩而前，張目睨余，忽俛首視其衣上之花，面色慘敗」と、珍無類の解釈を施してゐることが、何よりも有力にそれを物語つてゐる。訳者には、英文法の初歩的な知識にすら闕けるところがあつたのではないか。

この訳者が誰であるかは、詳らかでない。又、如上の五篇とも、同一人の訳出に係るものであるか、否か、——少くも、以下に述べる「墨斯格力夫礼典案」(The Musgrave Ritual.)などは、翻訳ぶりから見て、別人である可能性が強いと思はれるが、断定するには尚資料を欠く。

しかし、訳者の背後に、ある程度ドイルの作品に通じてゐた人物のあつたことは、確かであらう。蓋し、『繡像小説』に訳載されたホームズものは、既述の如く『回想録』中の諸篇であるが、「銀光馬案」以下の訳載順は、二三省略した作品のある点を除くと、原書の儘になつてゐる。これらの五篇に、「墨斯格力夫礼典案」を加へて上梓したのが、屢々も引く『補訳華生包探案』であるが、それも巻末に置かれるのではなく、「孀婦匿女案」と「書記被騙案」との間に挿入されてゐる。原書の配列に従へば、「書記被騙案」の後に次第すべきであるが、抄訳本といふ制約から改編を試みたまでであらう。

それはともかく、かうした事実を念頭に置いて、『繡像小説』がまづ「哥利亞司考得船案」を訳載し、単行上梓された折も、これを巻頭に据ゑてゐることを考へるならば、それは決して無作意なものとは考へ難い。換言すれば、「グロリア・スコット号事件」が、ホームズの手掛けた最初の探偵の仕事であり、トリヴァ老人との会話が、彼をして「それまで単なる道楽としか考へてゐなかつた仕事の、職業として十分に成立し得ることを覚らしめたそもその動機である」(was.....the very first thing which ever made me feel that a profession

might be made out of what had up to that time been the merest hobby.)と語られるからであるに違ひない。『補訳華生包探案』に見られる如上の改編も、同様な主旨の言葉が、「マスグレーヴの儀式」(The Musgrave Ritual.)中に見られるからで、この二つの作品を切り離して置くことには、問題があると考へられたからであらう。ドイルの作品に対する理解が、既にこの程度にまで進んで来てゐることは、注目に値する。

煩瑣ではあるが、今一つ「旅居病夫案」の一節を引いて置く。

某年十月某日天雨。薄暮時、華生与福而摩斯共坐齋中，明窗半啓，暮景蒼茫。福而摩斯蜷臥椅上，閱清晨郵局送來之信不止。時天頗燥熱，寒暑表升至九十度。華生曾行醫於印度，經其山川風土，体氣變遷，性不畏熱，故以氣候之不齊，而初冬如夏，亦覺安適。偶取日報讀之，則載有英國議政院齟齬事，街談巷議，言論沸騰，都人鄉土，悉偵騎四出伺消息，無異於本地風波，勞人排解矣。不覺興致索然，乃憶新林之幽景，南海之叢林，頗思策杖遨遊，藉資消遣，惟福而摩斯則喜奔走於稠人廣衆之中，探奇索隱，破世界之疑團，而山水之樂，未暇流連，故二人之思想，不啻背道而馳。華生見福而摩斯靜觀書札，不發一語，意緒無聊，乃擲報於側，兀坐凝思。適方寸馳騁間，忽為福而摩斯一声驚斷。

福曰、華生、君之思想、正應如此、判案如君、可免乖謬之譏矣。華生曰、否、恐難如君言、然不知福而摩斯何以知其心中之底蘊、忽有所驚觸、目視福而摩斯、問曰、福君、君何以知余有所思乎。是誠出人意表矣。福笑而應之曰、余前日非以波也小説之汗漫遊一篇語之耶。其中謂有某理想家、於推度中得知其友之隱念、君憶之否。君向以此為不足信。故余今日見君心中有所疑、亦踵彼之後塵、一試吾技、使君知箇中至理也。

華訳の末に「波也小説之汗漫遊」とある『汗漫遊』は、スキフトの『ガリヴァー遊行記』、一に『儁僑国』とも題された。波也——原文によつて、Edgar Allan Poe だと訣る——の小説に、『ガリヴァー』があるといふのは随分乱暴な話で、訳者の知識の水準をも窺はせるものであるが、それは偶々『繡像小説』に件の小説が訳載されてゐたのを利用し、読者の興味を繋がうとした苦肉

の策として、今は不問に附して置く。只、此処で一言したいのは、訳者の用いたテキストの問題である。と言へば、万事を察知せられる Sherlockian も少くはないであらう。

周知の如く、『入院患者』(The Resident Patient.)は、『回想録』の第二話として収められる作品であるが、当初、これが *Strand Magazine* (1893年8月号)及び *Harper's Weekly* (同8月12日号)誌上に掲げられた際には、例文の個所——原文で凡そ二頁に互る一節はなかつた。ポウが、『モルグ街の殺人』(Poe: *The Murders in the Rue Morgue.*)で、デュパンをして語らしめる「観察と推理による読心術の披露」をその儘に借用したこの一節は、もともと『ボール箱』(The Card-Board Box.)中の一節であつた。『ボール箱』については、発表当時から、残虐であり不倫の臭ひもするといった声が、作者に寄せられてゐた。そこで、『回想録』を単行上梓する際、ドイルはこの一篇を削除したが、件の一節を葬り去るに忍びなかつたか、これを『入院患者』の中に挿入したのである。George Newnes 版や John Murray 版など、当時イギリスで出版されたものは、凡てさうなつてゐる。アメリカでは、ニュー・ヨークの Harper 社から初版が出たが、何等かの手違ひがあつて、『ボール箱』を取めた儘のものが上梓された。従つて、『入院患者』の方には、右の一節がない。これは、作者の抗議によつて直ちに回収され、改めてタイトル・ページに“New and Revised Edition”と附記された修正版が出た。Harper 社の初版本が、Sherlockian のみならず、一般の愛書家間でも珍重され、高価を呼ぶ所以である。<sup>11)</sup>

テキストに關聯して、今一つ、『白銀号事件』(Silver Blaze.)中に出て来る Capleton といふ地名が、アメリカ版では Mapleton となつてゐることも、広く知られた事実である。華訳では、これを「客泊勒吞」と音写してゐるから、

11) *A Catalogue of Original Manuscripts and first and other important editions of the tales of Sherlock Holmes, as written by Arthur Conan Doyle., Together with important biographies, pastiches, articles, etc., and a few extraordinary association and unique items.*, New York, Scribner Bookstore, 1943. p. 12.; The Lilly Library, Indiana University.: *The First Hundred Year of Detective Fiction. 1841-1941.* p. 20. etc.



用ひられたテキストは、イギリス版のものであるに違ひない。其他の条件をも併せ考へて、それは日本でも流布した John Murray の廉価版であつたと思はれる。

この年には、今一篇、ドイル物として重要な作品の翻訳が、文明書局から上梓された。嵯長康・呉夢覺訳『唯一偵探譚四名案』がそれで、原作は『四つの署名』(*The Sign of Four*. 1890.) である。この小説は、翌光緒三十年十一月にも、別訳『案中案』が商務印書館から出てゐて、寅半生の『小説閒評』巻一には、

是書即『四名案』。其中情節，一無増減。然依事直叙，不及『四名案』之有神韻。<sup>12)</sup>……

とあるから、訳は周密体のもではなかつたが、『四名案』の方が遙かによい出来であつたらしいが、これ亦未見である。

### (3)

光緒三十[1904]年になると、事情は更に一転し、我々は驚くべき事実遭遇する。その一は、『新民叢報』第三年七号(通巻五十五号。光緒三十年十月二十三日刊)に、知新子訳述『歇洛克復生偵探案』として、『六つのナポレオン』(*The Adventure of the Six Napoleons*.) が訳載されてゐることである。この小説は、イギリスでは *The Strand Magazine* の1904年5月号に、アメリカでは一足早く、同年四月三十日発行の *Collier's Weekly* 誌に掲載されたものであるが、半年も経たぬ裡に、上海在住の知新室主人周桂笙によつて華訳され、横浜で発行されてゐた『新民叢報』誌上を飾つてゐるといふことになる。勿論、これを収めた『シャーロック・ホームズの帰還』(*The Return of Sherlock Holmes*. 1905.) は、未だ刊行されてゐないから、雑誌掲載の初出文から直接華訳されたものであることは、贅するまでもない。少しく、冒頭の一節を覗いて見よう。

12) 註2参照。

## 竊毀拿破侖遺像案全篇仍託為滑震記載語

倫敦偵探長李師德君，晚間來寓晤會，朝夕本相過從，無足異者，歇洛克君亦每喜招接之，藉聞警察局總機閔之消息，問論各訟案情節，往往能得其要領，解穢他人之疑竇，故李師德亦樂與之晉接也。是夕既相接晤，寒暄畢，無復他言，吸淡巴菰，意甚暇子。歇洛克注視之。既而問曰，手中得無有公事否。曰，無甚要事。曰，盍告我。李師德笑而不答。既而曰，吾意中確有一事，非故為秘諱。但，此等瑣屑事，不敢重勞足下耳。雖然，其事雖瑣屑，而其情則又甚怪異。吾固知足下不欲以尋常瑣事勞其心。然今茲之事，吾恐雖滑震先生，亦無能為力也。余問病歟。李師德曰，曷言夫病，癩耳。且不僅癩，迨將成怪矣。當此之時，安復有人寄怨毒於拿破侖一世。若是其甚，至欲毀其遺像者哉。歇洛克聞之，隱几徐徐而曰，此無與吾事也。

[右原文]

It was no very unusual thing for Mr. Lestrade, of Scotland Yard, to look in upon us of an evening, and his visits were welcome to Sherlock Holmes, for they enabled him to keep in touch with all that was going on at the police headquarters. In return for the news which Lestrade would bring, Holmes was always ready to listen with attention to the details of any case upon which the detective was engaged, and was able occasionally, without any active interference, to give some hint or suggestion drawn from his own vast knowledge and experience.

On this particular evening Lestrade had spoken of the weather and the newspapers. Then he had fallen silent, puffing thoughtfully at his cigar. Holmes looked keenly at him.

“Anything remarkable on hand?” he asked.

“Oh, no, Mr. Holmes, nothing very particular.”

“Then tell me all about it.”

Lestrade laughed.

“Well, Mr. Holmes, there is no use denying that there is

something on my mind. And yet it is such an absurd business that I hesitated to bother you about it. On the other hand, although it is trivial, it is undoubtedly queer, and I know that you have a taste for all that is out of the common. But in my opinion it comes more in Dr. Watson's line than ours."

"Disease?" said I.

"Madness, anyhow. And a queer madness too! You wouldn't think there was anyone living at this time of day who had such a hatred of Napoleon the First that he would break any image of him that he could see."

Holmes sank back in his chair.

"That's no business of mine," said he.

文言には文言としての格調があるから、如何しても周密体の直訳といふ訣には行かない場合がある。事実、右の例文でも、かなり自由に訳筆を振つてゐる個所が見られるが、意味は確実に捉へられてゐるのであるから、誤訳とするのは当たらない。難を言へば、原文のコマ・ピリオドやパラグラフに対する配慮が十分になされて居らず、ドイツ独特の会話の巧みさも、活写してゐない憾みがある。が、それらを此処に求めるのは、醜を得て蜀を望むものと言ふべきであらう。

訳者周桂笙は、上海の人。字は樹奎、辛龠・新庵・惺菴・知新室主人などと号した。その名は、林琴南の声名に圧せられて、閔歴さへ詳らかでないが、林琴南が蟹行文字に全く暗かつたのに対し、周氏の方は、英語を能くした。楊世驥氏が『文苑談往』に、

大家談到我国最早介绍西洋文学的人，都認定是林紓，殊不知周桂笙比林紓更早，可是現在已不復為人所記憶了。……他的翻譯就我所看到的計有童話『新庵諧鐸』一種，隨筆『新庵記萃』一種，小說『毒蛇圈』（法・鮑德著）・『八宝匣』・『失舟得舟』・『左右敵』・『飛訪木星』・『海底沉珠』・『紅痣案』（法・紀善著）・『含冤花』（英・培台爾著）・『妒婦謀夫案』・『福爾摩斯再生案』（英・陶高能著）各一種，另有『新庵五種』・『新庵九種』，係所訳

短篇小説的結集。『新庵諧詠』凡二卷（光緒二十六年，上海清華書局排印本），是他最早的翻譯，卷上係節詠『一千〇一夜』，卷下是童話，大抵出自『伊索寓言』一類的書。當日，他能注意到一向為人所漠視的兒童文學，實是很難得的。……他的『毒蛇圈』二卷（初載『新小説』。光緒三十年有廣智書局單行本），是用白話翻譯的，不失為一部最高的直詠的小説。<sup>13)</sup>

と説き、これを承けて、曹聚仁氏が『文壇五十年』に、

晚清訳学界有一位前輩，周桂笙（辛庵，上海人），他的翻譯西洋文學，比林紓更早，更深入。如楊世驥所說的，他是我国最早能虚心接受西洋文學的特長的。他不像林紓一樣，要説迭更司的小説好，必説其有似我国的太史公，他是能爽直地承認歐美文學的優点的。他翻譯的小説雖不多，大抵都是以淺近的文言和白話為工具，中国最早用白話介紹西洋文學的人，恐怕要算到他了。他的翻譯工作，在當日实抱有一種輸入新文學的企圖。他曾在一九〇六年，發起組織訳書交通公會，其宣言有云，「中国文學，素稱極盛，降至晚近，日即陵替。方今人類，日益進化，全球各國，交通便利，大抵競争愈烈，則智慧愈出，國亦日強，彰彰不可掩也。……夫旧者有尽，新者無窮，与其保守，無寧進取，而況新之於旧，相反而適相成，苟能以新思想，新學術源源輸入，俾躋我国於強盛之域，則旧學亦必因之昌大，卒収互相發明之効，此非訳書者所當有之事歟。」就在那些前驅的志士之中，我們又看到更進步的思想了。<sup>14)</sup>

と論じてゐるのは、正しくその業績を評価するものである。

因みに、この翻譯の首には、訳者の「弁言」がある。中国人の手になる最初の「探偵小説覚え書」と言つて差支へないものであり、且又、珍しい資料であるから、少しく長文ではあるが、煩を厭はずに引いて置く。

泰西之以小説名家者，肩背相望，所出版亦月異而歲不同。其間若写情小説之綺賦風流，科學小説之發明真理，理想小説之寄托遙深，偵探小説之機警活潑，偶一披覽，如入山陰道上，目不暇給。吾國視泰西，風俗既殊，嗜

13) 張静廬輯註『中国現代出版史料』甲編に収める「漢訳東西洋文學作品編目」（蒲梢）の附註による。

14) 曹聚仁『文壇五十年』・十三「晚清」

好亦別。故小説家之趨向，迥不相侔。尤以偵探小説，為吾國所絕乏，不能不讓彼獨步。蓋吾國刑律訟獄，大異泰西各國，偵探之說，實未嘗夢見。互市以來，外人伸張治外法權於租界，設立警察，亦有包探名目。然學無專門，徒為狐鼠城社。會審之案，又復瞻徇顧忌，加以時間有限，研究無心，至於內地讞案，動以刑求，暗無天日者，更不必論。如是，復安用偵探之勞其心血哉。至若泰西各國，最尊人權，涉訟者例得請人為弁護，故苟非証據確鑿，不能妄入人罪。此偵探學之作用所由廣也。而其人又皆深思好學之士，非徒以盜竊充捕役，無賴當公差者，所可同日語。用能迭破奇案，詭秘神妙，不可思議，偶有記載，傳誦一時，偵探小説即緣之而起。英國阿爾晤斯歇洛克者，近世之偵探名家也。所破各案，往往令人驚駭錯愕，目眩心悸。其友滑震，偶記一二事，晨甫脫稿，夕遍歐美，大有洛陽紙貴之概。故其國小説大家，陶高能氏，益附會其說，迭著偵探小説，托為滑震筆記，盛傳於世。蓋非爾，則不能有親歷其境之妙也。吾國若時務報館張氏所訳者尚矣。厥後統訳者，如華生包探案等，亦即滑震筆記耳。嗣自歇洛克逝世後，雖奇案纍纍，而他人無復有如歇氏之苦心思索，默運腦髓以破之者，而陶氏亦幾有擱筆之歎。於是創為歇洛克復生之說，藉假盛名，實其記載，成書若干，歐美各國，風行迨遍。走，不揣謏陋，願以此歇氏復生後之包探案，介紹於吾國小説界中。至於滑震筆記原書，雖幾經統訳，而未尽者尚多。自顧不才，未敢妄為紹統也。左篇稿脫，乃弁數語於簡端。甲辰中秋，上海知新室主周柱生氏。

ホームズを實在する「近世之偵探名家也」と考へてゐるのは、愛敬であるが、實際に、探偵依頼の為、ベーカー街 221 番地乙号のホームズの部屋を訪ねたり、ドイルに紹介を頼みに来る人が、跡を絶たなかつたといふのであるから、とやかく咎めるまでもない。又、勝れた探偵小説が、犯罪捜査や鑑識に寄与することのあるのも事實であらうから、訳者の探偵小説観が功利的に過ぎるといつた非難も、當を得まい。当代に於ける探偵小説の紹介は、単なる娯樂の提供以上の意味を有つものであつた筈である。

ところで、*The Strand Magazine* その他の雑誌から、直接華訳された小説は、「竊拿破崙遺像案」だけではなかつた。未見の資料ながら、奚若訳『福爾摩斯

再生案』(*The Return of Sherlock Holmes.*) 四冊のうち、三冊までが、この年のうちに小説林社から出てゐるのである。第四冊は、遅れて光緒三十二年(1906)に上梓されてゐるから、この分は別であるが、便宜上併せて表示すれば次の如くである。

(華 訳 名)	(原 作 名)	(初出年月日)
第一冊		
再生第一案	The Adventure of the Empty House.	1903年10月 (Strand Mag.) " 9月26日(Collier's)
第二冊		
亜特克之焚屍案	The Adventure of the Norwood Builder.	1903年11月 (Ibid.) " 10月31日 (Ibid.)
卻令登乘自転車案	The Adventure of the Solitary Cyclist.	1904年1月 (Ibid.) 1903年12月26日 (Ibid.)
第三冊		
麥克來登之小学校奇案	The Adventure of the Priory School.	1904年2月 (Ibid.) " 1月31日 (Ibid.)
必爾逢登之被螫案	The Adventure of Charles Augustus Milvaton.	1904年4月 (Ibid.) " 3月26日 (Ibid.)
第四冊		
毀拿破崙像案	The Adventure of the Six Napoleons.	1904年5月 (Ibid.) " 4月30日 (Ibid.)
黒彼得被殺案	The Adventure of Black Peter.	1904年3月 (Ibid.) " 2月27日 (Ibid.)
密碼被殺案	The Adventure of the Dancing Men. ?	1903年12月 (Ibid.) " 12月5日 (Ibid.)
陸聖書院竊題案	The Adventure of the Three Students.	1904年6月 (Ibid.) " 9月24日 (Ibid.)
虚無党案	The Adventure of the Golden Pince-Nez.	1904年7月 (Ibid.) " 10月29日 (Ibid.)

訳者奚若は、江蘇省元和の人、初め商務印書館編訳部に、後には小説林社出版部に在つて、翻譯に従事した人と覚しいが、氏姓・閲歴共に詳らかでない。英語はかなり出来た様で、『繡像小説』第十一期(光緒二十九年九月一日刊)以下に『天方夜譚』(*Arabian Nights' Entertainment.*)を Richard Burton の英訳本によつて訳載してゐるのを始め、焦士威奴の『秘密海島』(*Jules Verne: The Mysterious Island. 1875*)・馬利孫の『馬丁休脱偵探案』(*Arthur Morrison の Martin Hewitt ものの選訳。後述*)など、冒険小説乃至は探偵小説の類を多く訳した。

この年には、今一篇ドイルの『大復仇』(原作未詳)を、黄人(摩西)と奚若

とが合訳してゐるが、陳彦訳『恩仇血』（原作未詳）と共に、未だ披見する機会を得ない。

商務印書館編訳所訳印の『案中案』が、やはりこの年の十一月に上梓されてゐることは、上に一言したが、これは後に同書館発行の『説部叢書』第一集第六編に収められたので、他に較べると比較的入手し易い。訳文は、

回顧撒特斯，則面無人色，木立不動，詢之始知其与勃沙洛茂為學生也。余謂福曰，可懼哉，将奈何。福曰，必先啓門。言已，力推之，不動。三人併力猛推，戛然一声，鎖裂門關。其室



類化学室，向門一隅，玻璃瓶羅立於架，桌上滿置電瓶玻璃管蒸器。室東隅，有強水數袋，水漬蜿蜒樓板上，室中空氣甚劣，一小梯倚壁，緣梯仰視，見頂板有一穴，大僅容身，身繩一束，亂置梯下，勃沙洛茂坐桌旁椅中，首枕左肩，面帶怪狀，撫之已僵，度死已數句鐘矣。自首至足，皆現異相，手置桌上，旁倚一灰色巨槌，槌端裝一鎚形之石，繞以鉄絲。又有一破紙，福取視，蹙額曰，華生試閱之。余接視，則又為 The Sign of Four 四花押數字。余不解所謂。福曰，無他，謀殺案耳。吾固預料之矣。隨以手指死者耳旁，則一長黒刺，深入膚内。余曰，此樹刺也。曰，然。是刺甚毒，子其出之，雖然宜慎。余乃以兩指甲挾之出，膚無傷痕，僅有血一小点。謂福曰，余於此案，益滋疑惑。福曰，頭為謀斃，何疑乎。

といった調子のもので、わざわざ原文を参照するまでもなく、大意訳である。所引の文は、第五章「ボンディンチェリ荘の惨劇」(The Tragedy of Pondicherry Lodge.)の一節であるが、華訳では、さうした一章一章の枠をも取払つて、巻首から巻末まで一気に書下す方法を採用してゐる。勿論、段落の個所や会話の個所での改行といったことも、全く行はれてゐない。ただ筋を逐うて直叙するばかりであるから、無味乾燥、真に読み辛いものになつてゐる。前掲、寅半生の文に、「依事直叙，不及『四名案』之有神韻」とあるのは、訳文の巧

拙もさることながら、如上の事実も大いに関係してゐるであらう。

さうした欠陥が認められるにもせよ、平静に之を眺めれば、『案中案』の訳文も、さう拙いものではない。失笑を買ふ様な誤訳も少なければ、詞章もそれなりに整つて居り、当代の水準からすれば、まづまづの翻訳と言へるのではないかと思ふ。ここに『四名案』の訳文を対照することが出来ないのは聊か残念であるが、「有神韻」とされる『四名案』についても、一方では、同じ評者によつて、「惜乎全書人名多至五六字，易啓閱者之厭，苟易以中国体例，当更增趣味不少」<sup>15)</sup>といった批評が加へられてゐるし、「訳筆冗複，可刪三之一。然写情栩栩如生，固小説之佳構也」<sup>16)</sup>と評する読者もあつた。謂ふところの「中国体例」とは、章回体小説を指し、「訳筆冗複」とするのは、古文にのみ眼馴れた口つきよりする評であらう。してみると、彼等の要求するところが奈辺に在つたか、ほぼ見当がつく。外国の文学を受容れるには、それに適はしい新しい文体が必要であるが、さうした文体の近代化が行はれるには、尚時間が必要であつた。翻訳そのものが草創期の所産であれば、評家の眼も未だ幼い水準に在つたことも、亦止むを得ぬところである。

因みに、本書の奥書には、原著者として「英国屠哀爾士」とある。ドイルは、中国では、柯南道爾・柯南達利・科楠岱爾などと音写されるのが普通であるが、前掲『四名案』では愛考難陶列、『竊毀拿破崙遺像案』では陶高能、本書では右の如くであつて、判読に苦しむ人名も尠くはない。「ギョオテは俺のことかとゲーテ言ひ」とは川柳子の揶揄であるが、中国では使用する文字が表意文字であるだけに、問題は深刻である。今、それを改まつて詳論する余裕はないが<sup>17)</sup>、音訳するにしても、訳者の出自によつて、粵音・閩音・吳音等々さまざまな方音が用ゐられ、その間に何等の法則も統一もなく、従つて同一の人名・地名にも、訳者によつて別様の字が充てられる結果となる。そればかりではない。かうした固有名詞が頻繁に行文中に混つて来ると、如何なるか。中国文としてのリズム感が失はれるとか、訳文に湿ひがなくなるとかいつた程度の生易

15) 寅半生『小説閒評』（註2参照）。

16) 顧燮光『小説経眼録』（註1参照）。

17) 拙稿「現代中国に於ける国語国字問題」（ローマ字教育会編『ことばの教育』第15～18号）参照。



しいものではない。判読に苦しむ場合すら生じて来る。寅半生が提示する今一つの問題は、正にこれであつた。

かうした問題を解決する方法として、最も普通に行はれたのは、人名には一本の、地名には二本の傍線(専名号)を引いて識別する方法で、既に Rev. Wm. Burns 訳『天路歷程』(Bunyan: *The Pilgrim's Progress.*) に用ゐられてゐる。確かに、これによつて目的の一斑は果される訣ではあるが、それにも自ら限界がある。例へば、次の訳文を見よ。

福復面層母提耳曰、君今晨離余家、已有尾君之後者、君識之否。曾母提耳曰、何人。福曰、不能告君、此余所最愧者、鄰里戚串中、有濃鬚滿頰者否。層母提耳思之有頃、瞿然曰、有之。查斯旧僕、名巴林母。福曰、近何在。層母提耳曰、管理巴斯赤衛利旧宅事。福曰、当察其尚留宅中否、或已来倫敦。層母提耳曰、今奚自察之。福曰、可以電往詢、彼於宅中諸事、已整備否、亨利將歸矣。孰為最近巴斯赤衛利旧宅之電局。層母提耳曰、科林本最近。福曰、再以電致科林本電局員、囑其親交巴林母。巴林母不在、即將原電寄還羅霜本林客寓亨利收。巴林母曾来倫敦与否、即此可決。亨利曰、巴林母為吾家旧僕乎。層母提耳曰、自其祖管理巴斯赤衛利旧宅事、迄巴林母四世矣。彼夫婦素為鄉人所親愛。亨利曰、吾家現無主者、彼夫婦居彼必自得、層母提耳曰、然。福曰、查斯遺書内、有云以貲分給巴林母否、層母提耳曰、許彼夫婦、各得五百鎊。

印刷の都合で、本文の右側に附してある専名号を、下に移した。所引の文は、光緒三十一[1905]年二月、『説部叢書』第一集第十四編に収められた陸康華・黄大鈞合訳『偵探小説降妖記』(Conan Doyle: *The Hound of the Baskervilles.* 1901-02) 第五章「三度目も失敗」(Three Broken Threads) の一節である。訳文は周密体ではないが、勘所は押へてあり、良心的な翻訳の部類に属する。されば、侗生の如き、



偵探小説最受歡迎、近年出版最多、不乏佳作、如『奪嫡奇冤』・『福爾摩

斯偵探案』・『降妖記』等書、其最著者也。<sup>18)</sup>

と評してゐるが、それにしても何と専名号の煩瑣なことか。しかも、中国に於ける、この種の問題は、解決する術のない宿命的な課題である。かくて、清末に於ける翻訳文壇は、この前後から漸く壁のあることを意識する様になる。さうして、その壁を打破る為の模索的な試みが、文学革命期まで続く。

筆を原に戻す。光緒三十二年には、如上の『補訳華生包探案』や『福爾摩斯再生案』第四冊が出た他、小説林社から佚名訳『福爾摩斯偵探第一案』(A Study in Scarlet? "The Gloria Scott".?)・駕水不因人訳『深淺印』(原作未詳)・馬汝賢訳『黄金骨』(原作未詳)などが出版されてゐる。後二者は、共にドイル物といふが、何れも未見であるので、何とも言へない。

超えて、三十三[1907]年になると、漸く林琴南が、この方面でも活躍する様になる。林琴南の訳したドイルの作品は、

(華訳名)	(原作名)	(合訳者)	(発行所)	(刊年)
金風鉄雨録	(Micah Clarke, His statement as made to his three grandchildren, etc. 1889.)	曾宗鞏	商務印書館	光緒三十三年六月
髯刺客伝 <sup>19)</sup>	(Uncle Bernac: A Memory of the Empire. 1897.)	魏易	同	同三十四年五月
恨綺愁羅記 <sup>20)</sup>	(The Refugees. A Tale of two Continents. 1893.)	魏易	同	同五月

18) 侗生『小説叢話』(阿英編『晚清文学叢鈔』・『小説戯曲研究卷』所収)。

19) 寒光の『林琴南』に、本書の原典を“*The Refugees.*”と誤つて以来、朱義胄の『春覚齋著述記』(『林畏廬先生学行譜記』四種之二)・韓迪原の『近代翻訳史話』(『翻譯理論叢書』之二)・国立中央図書館編『近百年来中訳西書目録』(『現代国民基本知識叢書』第五輯)など皆之に仿ふが、戴けない。林序に、「作者之伝刺客、非伝刺客也、状拿破崙之驕也。吾訳『恨綺愁羅記』、亦此君手筆、乃曲写魯意十四塞恣専横之状、較諸明之武宗、世宗为烈。妓伝之叙拿破崙軼事、驕乃更甚、至面枢近大臣及疆場師武而淫焉。而其所言所行、又皆拿破崙本紀所勿載、或且遺事伝聞人口、作者拏拾成爲專書、用以播拿破崙之穢迹、未可知也云々」とあるから、“*The Refugees*”などではなく、Napoleonic Stories と呼ばれるその作品群中に、原典は求めなければならぬことは明らかである。既に、馬泰来氏が「林琴南所訳小説書目」(『出版月刊』第二卷第十二期)に指摘する如く、“*Uncle Bernac.*”とするのが正しい。

20) 寒光の『林琴南』に、「是書僅訳上半部、但能自成首尾。内容与 R. Rolland: *Le Montespan* (李琮・辛質合訳的『孟德斯榜夫人』) 同一故事; 但我覺得這書好得多。」(p. 95) とある以外、原典の追究が行はれてゐないが、これが“*The Refugees*”

歇洛克奇案開場	( <i>A Study in Scarlet</i> . 1888)	魏易	同	同 六月
電影楼台	( <i>The Doing of Raffles Haw</i> . 1892. ?)	魏易	同	同 八月
蛇女士伝	( ? )	魏易	同	同 九月
黒太子南征録 <sup>21)</sup>	( <i>The White Company</i> . 1891.)	魏易	同	宣統元年 四月

の如くであつて、多くは歴史小説である。ドイルは、自ら歴史小説家を以て任じ、「空想や規模の点ではハガード (Sir. Henry Rider Haggard. 1856-1925) に及ばぬかも知れないが、せめて作品の質と思想と面白さの点では、ハガードを凌ぐ様な歴史小説を書きたい」と念願してゐたといふ。又、ボア戦争に従軍し、『大ボア戦争』(*The Great Boer War*. 1900.)・『南アフリカ戦争、その原因と行動』(*The War in South Africa; its Causes and Conduct.*)といつた著書をも遺した彼は、トランスヴァールに活躍し数多くの著書を遺したハガードと並んで、アフリカ問題の権威として著聞し、インド問題に一家言を有してゐたキプリング (Rudyard Kipling. 1865-1936.) と共に、文壇に鼎立した異才でもあつた。その生涯を通じて、二十五種ものハガードの作品を訳した林琴南及びその協力者たちが、ハガードに次いでドイルの歴史小説に着目したことは、或いは当然であつたかも知れない。が、歴史小説家としてのドイルの価値は、まだ正しくは認められてゐなかつた当代のことである。やはり、訳者の見識は高く評価すべきものであらう。而して、清末に於けるドイルの紹介といふ立場からすると、これ亦見通し得ないことになるが、本稿の主題からは離れることになるので、ここでは採り上げない。

ただ一篇、見通し得ないものに、『歇洛克奇案開場』がある。寒光は、本書について、

である。Montespan, Françoise Athenais, marquise de 1641-1707 は、ルイ十四世時代の女官長、初めマリヤ・テレサに仕へたが、幾何もなくしてルイ十四世の寵を蒙り、その子数人を産んで後宮に権勢を振つた。当時、フランス革命の研究の余波として、彼女への関心が高まり、上掲ロマン・ローランの著書や H. N. Williams の "*Madame de Montespan*. (1903)" などが、数多く出版された。ドイルの作品も、この流行の後を逐ふものであつた。

21) 寒光の『林琴南』に、原典を "*Sir. Nigel*." として以来、諸書皆その誤りを踏襲してゐる。これも、馬泰来氏の指摘する如く、"*The White Company*" に訂正すべきである。

林氏翻譯偵探案的意思是很好的，絕不似一般偵探小說投機者的無聊；這意思只要看『神樞鬼藏錄』的序文便可以明白的。不過那時的風氣和見識，也很有值得我們注意的地方。惲鉄樵在『說薈』裏說，「……吾国新小説之破天荒為『茶花女遺事』・『茄因小伝』，若其寔昌寔熾之時代，則本館所訳『福爾摩斯偵探案』是也。偵探案有為林琴南筆述者，又有蔣竹莊潤辞者，故為逸訳小説中最善本。士大夫多喜閱之，詫為得未曾有。……（一一三頁）

と、当代の翻譯探偵小説中でも優れた翻譯であることを指摘してゐるが、遺憾なことには、これ亦未見である。但、原作が『緋色の研究』(A Study in Scarlet.) であることは、林訳に附せられた陳熙績の跋に、

嗟乎！約・仏・森者，西国之越勾踐，伍子胥也。流離顛越，転徒数洲，冒霜露，忍饑渴，蓋幾填溝壑者数矣。卒之，身可苦，名可辱，而此心耿耿，則任千劓万磨，必達其志而後已。此与臥薪嘗胆者何以異？太史公曰：伍子胥剛戾忍詢能成大事，方其窘於江上道乞食，志豈嘗須臾忘郢耶？吾於約・仏・森亦云。及其二憾，卒逢一毒其軀，一割其腹，吾知即不遇福爾摩斯，亦必帰国美洲，一瞑而万世不視也。何則？積仇既復，夙願已償，理得心安，軀殼何恋？天特假手福爾摩斯以暴其事於当世耳。

とあることによつて、明らかである。

ところで、陳熙績、字して秀跋は、福建省閩侯の人で、林琴南とは親交のあつた間柄であるから、「是篇雖小，亦借鑒之嚆矢也，吾願閱之者勿作尋常之偵探談觀，而与太史公之『越世家』・『伍員列伝』参読之可也」とするその作品評には、林琴南のそれが幾分か代弁されてゐるかも知れない。しかし、探偵小説に対する林琴南の理解が、今少しく高い水準に在つたことも事実で、その一端は、次に掲げる訳者の序文によつても、窮ふことが出来る。

……余曾訳『神樞鬼藏錄』一書，亦言包探者，顧書名不直著「包探」二字，特借用元微之『南陽郡王碑』「遂貫穿於神樞鬼藏之間」句。余名不切，宜人之不以為異。今則直標其名曰『奇案開場』，此歐洛克試手探奇者也。文先言殺人者之敗露，下卷始敘其由，令読者駭其前而必釋其後，而書中故為停頓蓄積，待結穴処，始一一点清其發覺之故，令読者恍然，此顧虎頭所

謂伝神阿堵也。寥寥僅三万余字，借之破睡亦佳。

『緋色の研究』といふ奇抜な原書名を『奇案開場』と移すのは、少しく平凡に過ぎるが、小説の冒頭に事件の結末を置き、筋を錯綜させながら原因を遡求して、発端まで辿り着くといふ近代探偵小説の骨法——それは、ポウによつて創始せられたものであるが——は理解してゐるから、矢張り小説の読み方は心得てゐると言はねばならぬ。

因みに、前掲、陳氏の跋によれば、「是書旧有訳本，然先生之訳之，則自成為先生之筆墨，亦自有先生之微旨在也」と、林訳以前にも別訳が出てゐることが知られるが、それは何か。既述の黄人・奚若合訳『大復仇』・陳彦訳『恩仇血』・佚名訳『福爾摩斯偵探第一案』の何れかがそれらしく想はれるが、断定すべき資料は何も有たぬ。

#### （４）

光緒三十[1904]年前後から民国の初めにかけては、文字通り探偵小説の全盛期で、ドイツの他にも、次章以下で述べる有名無名の作家と作品とが、洪水の様に紹介せられた。それと共に、デュパン (Auguste Dupin.)、ヒュイット (Martin Hewitt.)、ニック・カーター (Nick Carter.)、ルパン (Arsene Lupin.) 等々の名も、中国の読者に馴染みの深いものとなつて来るが、何と言つても、圧倒的な人気を誇るのは、ホームズの名であつた。湯心存・戴鴻葉合訳『紅髮案』(The Red-Headed League. 宣統元年刊。)の様な新訳が、種々上梓せられたのは贅するまでもない。端的に言つて、「福爾摩斯探案」の名を冠せさへすれば、何でも売れるといふ状態であつたらしい。それを物語る一の事例が、此処にある。光緒三十三[1907]年、新世界小説社から出版された白侶鴻訳『福爾摩斯最後之奇案』(未見)が、それである。これは、「最後の事件」(The Final Problem.)とも『最後の挨拶』(His Last Bow. 1917.)とも全く関係のない、つまりは贋作である。『小説管窺録』の著者(徐念慈?)は、それを指摘して、次の如く言ふ。流石である。

是書顛末尚未卒読，第其廣告有謂「友人白君留学英国，与其後嗣立露辣

斯君同学，得見其家乘軼事，為福君晚年在法偵獲之奇案，訊此」云云。案『福爾摩斯探案』係著名小説家陶高能（Sir. A. Conan Doyle）所著，彼以華生自稱，業醫，本有『福爾摩斯化身』一篇，詳言著書之故。是福爾摩斯為理想之偵探，非實有其人可知已，何來此後嗣立露辣斯君？本社於『化身』一篇，早已訊出，擬於刊行全案時列入，質諸當世之喜讀『福爾摩斯偵探案』者。

ところで、寅半生の『小説閒評』によれば、この小説の筋は、次の如きものであるといふ。

是書凡二十二節。敘法國鏡岩村富紳石雅魯，中年喪耦，無子，僅一女錦霞，遂統娶律師柯利牟之女柯施媚為繼室。時錦霞年已及笄，為母舅馬利達攜去，与女立娥同入學堂。兩美相逢，異常莫逆。忽接父病電音，馬利達父女親送錦霞歸家。至則雅魯已歿。父女乃暫留，幫辦喪務。一日，立娥早起，閒步入園，陡被手槍轟斃，徧緝凶手不獲。旋由神探福爾摩斯与幫辦國海，查係柯利牟為謀產起見，買囑赫立木謀害錦霞，誤斃立娥，案遂破。初，立娥曾与博士嘉萍訂婚，一聞凶信，嘉萍即往鏡岩村哭祭，為柯施媚陷害，誘入警署，至是得釋，後遂与錦霞結婚云。立娥不死於家，而死於石氏，其為錦霞替身，善讀小説者一望而知。乃神探如福爾摩斯，猶細詢馬利達家世，並欲檢看乃姪旧信，雖係曲佈疑陣，未免錯尋綫索。

これを以てこれを見れば、贋作であるにしても、かなり西洋種の感じがする。或いは、日本の讀書界に翻訳乃至は翻案された探偵小説を重訳して、ドイルの作品らしく装つたのではないかと、疑つてみてもゐるのであるが、該当する作品を未だ想起し得ない。陳冷血の『福爾摩斯來華偵探案』（『時報』連載、年月・号数未詳）とか、シャーロック・ホームズとアルセーヌ・ルパンとが競争して犯人を追跡する趣きを綴つた程小青の『雙雄闘智録』あたりならば、題名からしても創作であることは判然とするのであるが、少し手の込んだものになると、なかなか判断が付き難い。この類のものは、尚他にも幾つかあるのではなからうか。

筆を原に戻す。上に引く『小説管窺録』の文に、「本社於『化身』一篇，早

已訳出、擬於刊行全案時列入」とあるところから推すと、『シャーロック・ホームズ全集』刊行の計画は、既に清末時に於て小説林社内で立てられてゐたらしい。しかし、小説林社のそれは、徐念慈の病歿（光緒三十四年六月）と同社の解散との為に、遂に実現を見なかつた。

かくて数年の後、全集発行の試みは、更めて周瘦鵬・巖独鶴・程小青等の手で企劃立案され、実行に移されることとなつた。民国五〔1916〕年四月、中華書局から上梓された『福爾摩斯偵探案全集』十二冊がそれで、上記三人の他に、陳小蝶・天虛我生（陳栩）・劉半農・陳霆銳・天侔・常覺・漁火の七人が、翻訳に従事した。収めるところ、1914年までの長短篇合して四十四篇、文言ではあるが、何れも新しく訳出したものである。勿論、当時は『シャーロック・ホームズの事件簿』（*The Case Book of Sherlock Holmes*. 1927.）に収められた諸篇は書かれてゐないし、『シャーロック・ホームズ最後の挨拶』（*His Last Bow*. 1917.）中の諸篇も、大部分は既に発表されてゐるものの、未だ纏められ単行上梓されるに至つてはゐない。従つて、『最後の挨拶』に収められた「赤い輪」（*The Adventure of the Red Circle*）以下の七篇は、何れも初出の雑誌から華訳されたのであつて、書肆が「坊間雖有訳本、率皆東鱗西爪、未具全豹」と言ひ、「其中半為我国所未訳、即日本亦未訳有全璧也」と誇るのも、所以なきではない。現に、江戸川乱歩氏の如きも、

中国は探偵小説では日本より遙かに遅れてゐるといふのが常識だが、少くともホームズの翻訳では向ふの方が進んでゐたことが分り、ちよつと意外に感じた。日本でも『冒険』・『思出』・『帰還』などの主な作品は古くから訳されてゐたけれども、『最後の挨拶』をも含めて全訳されたのは、改造社『 Doyle全集』が最初であつたかと思ふ。その改造社版が出たのは昭和六年末から七年末にかけてで、（これには第五冊『事件簿』も収められたとはいへ）前記中華の全集よりおくれること十数年である。

と、驚いてゐる程である。<sup>22)</sup>

22) 江戸川乱歩「福爾摩斯偵探案全集」（『探偵作家クラブ会報』昭和24年11月号）。後、『海外探偵小説作家と作品』所収）。尚、江戸川氏のこの見解には、かなりの誤解がある。以下の敘述で、それは逐々明らかとなるであらう。

江戸川氏は、更に若干の作品を抽いて、華訳名と改造社版の題名とを対照してゐるが、全部に及んではゐないから、参考までに掲げて置かう。華訳名の下に線を引くのは、始めて華訳されたと見られる作品である。

血 書	<i>A Study in Scarlet.</i>	1887単行
仏 国 宝	<i>The Sign of the Four.</i>	1890 "
情 影	<i>A Scandal in Bohemia.</i>	<i>Adventures</i> 1892
紅 髪 会	<i>The Red-Headed League.</i>	(Ibid.)
怪 新 郎	<i>A Case of Identity.</i>	(Ibid.)
弑 父 案	<i>The Boscombe Valley Mystery.</i>	(Ibid.)
五 橘 核	<i>The Five Orange Pips.</i>	(Ibid.)
丐者許影	<i>The Man with the Twisted Lip.</i>	(Ibid.)
藍 宝 石	<i>The Adventure of the Blue Carbuncle.</i>	(Ibid.)
彩 色 帶	<i>The Adventure of the Speckled Band.</i>	(Ibid.)
機師之指	<i>The Adventure of the Engineer's Thumb.</i>	(Ibid.)
怪 新 娘	<i>The Adventure of the Noble Bachelor.</i>	(Ibid.)
翡 翠 冠	<i>The Adventure of the Beryl Coronet.</i>	(Ibid.)
金 絲 髮	<i>The Adventure of the Copper Beeches.</i>	(Ibid.)
失馬得馬	<i>Silver Blaze.</i>	<i>Memoirs</i> 1894
窓中人面	<i>The Yellow Face.</i>	(Ibid.)
備書受給	<i>The Stockbroker's Clerk.</i>	(Ibid.)
孤舟浩劫	<i>The Gloria Scott.</i>	(Ibid.)
窟中秘宝	<i>The Musgrave Ritual.</i>	(Ibid.)
半夜槍声	<i>The Reigate Squires.</i>	(Ibid.)
悽背眩人	<i>The Crooked Man.</i>	(Ibid.)
客邸病夫	<i>The Resident Patient.</i>	(Ibid.)
希臘舌人	<i>The Greek Interpreter.</i>	(Ibid.)
海軍密約	<i>The Naval Treaty.</i>	(Ibid.)
懸崖撒手	<i>The Final Problem.</i>	(Ibid.)
絳市重蘇	<i>The Adventure of the Empty House.</i>	<i>Returne</i> 1905



火中秘計	The Adventure of the Norwood Builder.	(Ibid.)
壁上奇書	The Adventure of the Dancing Men.	(Ibid.)
碧巷雙車	The Adventure of the Solitary Cyclist.	(Ibid.)
隰原蹄迹	The Adventure of the Priory School.	(Ibid.)
隔簾髻影	The Adventure of the Black Peter.	(Ibid.)
室内槍声	The Adventure of Charles Augustus Milverton.	(Ibid.)
剖腹藏珠	The Adventure of the Six Napoleons.	(Ibid.)
赤心護主	The Adventure of the Three Students.	(Ibid.)
雪窖沉冤	The Adventure of the Golden Pince-Nez.	(Ibid.)
荒村輪影	The Adventure of the Missing Three-Quarter.	(Ibid.)
情天決死	The Adventure of the Abbey Grange.	(Ibid.)
掌中倩影	The Adventure of the Second Stain.	(Ibid.)
獒 崇	<i>The Hound of the Baskervilles.</i>	1902
		( <i>Strand Mag.</i> etc.)
魔 足	The Adventure of the Devil's Foot.	Dec., 1911
紅 圓 会	The Adventure of the Red Circle.	Mar.-Apr., 1911
病 詭	The Adventure of the Dying Detective.	Dec. 1913
竊 凶 案	The Adventure of the Bruce-Partington Plans.	Dec., 1908
罪 藪 <sup>23)</sup>	The Valley of Fear.	Sept.-May., 1914-15

この全集は、民国十二〔1923〕年までに、二十版を重ねたが、その頃は、既に白話文学の運動も軌道に乗つてゐた。かくて、民国十四〔1925〕年、大東書局から『福爾摩斯新探案全集』四冊が上梓せられるが、これは「皇冕宝石」(The Adventure of the Mazarin Stone.)・「雷神橋畔」(The Problem of Thor Bridge.)・「匍匐之人」(The Adventure of the Creeping Man.)・「吮血記」(The Adventure of the Sussex Vampire.)等後に『シャーロック・ホームズの事件簿』(*The Case Book of Sherlock Holmes.* 1927.)に収められた作

23) 寒光の『林琴南』は、『歇洛克奇案開場』(*A Study in Scarlet.*)を解説した末に、「此書即商務出版王汝荃所訳の『歴劫恩仇』、『又福爾摩斯偵探案全集』訳名為『罪藪』と記してゐるが、これ亦誤。“*The Valley of Fear*”であらう。

品を含む九篇を、白話訳によつて収めたものであつた。訳者は、周瘦鵬・張舎我・張蕨蕨の三人、勿論、当時は未だ『事件簿』は上梓せられてゐないから、上記の諸篇は、何れも雑誌から直接訳出されたものである。超えて、民国十六〔1927〕年には、程小青等による『福爾摩斯探案大全集』が、世界書局から出版された。これは、白話による全作品の改訳であるが、今はその事実を記すに止める。<sup>24)</sup>

(なかむら ただゆき)

---

24) 范煙橋「民国旧派小説史略」(魏紹昌編『鴛鴦蝴蝶派研究資料』所収)・同『中国小説史』第五章第二節「最近之十五年」。